

伊豆沼・内沼の生物多様性

横山 潤(山形大・理・生物)

宮城県北部に位置する伊豆沼・内沼は、マガンを始めとする水鳥の生息地として国の天然記念物、鳥獣保護区、ラムサール条約の登録湿地に指定されている。おびただしい数の水鳥が飛来する冬の光景と、ハスが咲き乱れる夏の光景が、一般によく知られる伊豆沼・内沼の「自然」ではないだろうか。しかし、伊豆沼・内沼の自然環境を特徴づける生物は鳥類やハスばかりではない。伊豆沼・内沼は、本州の平地に本来存在していた典型的な水辺の生物相を量的にも質的にも良好な状態で残しているという普遍性と、この地域の生物相が北方系と南方系の両方の要素を併せ持つという特殊性の、二つの側面から特徴づけられる、国内でも希少な地域である。

伊豆沼では、夏にハスとともにアサザやガガブタが湖面を彩る美しい光景が広がる。この2種の植物は、かつては本州以南の各地に広く分布していた植物であったが、現在では各地で減少しており、絶滅が心配される植物となっている。水中に目を転じて、同様に各地で絶滅が心配されているゼニタナゴに代表される淡水魚類や、クロモ、オオトリゲモ、ホソバミズヒキモ、セキシウモなど各地で減少している沈水植物を擁する伊豆沼・内沼の生物相は、日本全土から急速に失われつつある、かつての平地の沼の様子をそのまま残す貴重なものである。

伊豆沼・内沼周辺に生育する植物には、特徴的な種類が数多く認められる。アサザやガガブタと同じ仲間のヒメシロアサザは、伊豆沼が分布の北限になっている南方系の植物である。ガガブタ自身もこの地域が太平洋側の北限になっている。その一方で、宮城県内では伊豆沼・内沼が唯一の自生地となっているツルスゲは、北海道に分布の中心がある北方系の植物である。通常なら高標高地に自生するヤナギトラノオも、沼に隣接する湿地で見ることができる。これらの植物が同じ場所に生育する様子は、他では見ることのできない特殊なものである。

この地域の生物は、高山や原生林のように人の影響から切り離されて守られてきたのではなく、人の生活とともに今日まで存在してきたことは、特に注目すべき点である。人が適度に関わることで、やがて消え行く運命の生物の住処が生み出され、それが伊豆沼・内沼の生物の多様性を支えてきた。人も含めた微妙なバランスの上に成り立っている伊豆沼・内沼の生物相は、単純に保護するだけでは守れない難しさをはらんでいる。

この伊豆沼・内沼の貴重な生物相は、現在その存亡の危機に瀕している。淡水魚類や沈水植物はその大部分が往時の面影をとどめないまでに失われ、貴重な植物も姿を消しつつある。伊豆沼・内沼を取り巻く状況が大きく変貌した現在、貴重な伊豆沼・内沼の生物をいかに良い状態で次世代につないでいくか、多くの人の知恵が必要な時期にさしかかっている。